

僕のアメリカ留学

斐太高等学校 平野 右陸 (アメリカ合衆国)

僕はアメリカに留学してたくさんのことを学びました。その中でも特に「身近な人がいることの大切さ」を学びました。

日本では、いつも身近に友達や家族、先生など、たくさん知っている人がいます。当然ですが、この留学でアメリカに着いたばかりの時は、知っている人、頼ることのできる存在は周りに一人もいませんでした。行く前から覚悟はしていたものの、頼れる人がいないことはとても不安でした。ホストファミリーに言えば助けてくれるということは知っていても、上手に伝えることができるかがとても不安でした。

そんな多くの不安とともに始まった僕の留学生活ですが、部活動に入った日から不安がだんだんとなくなりました。最初の部活動の日に僕が誰ともしゃべることができないでいると、一人の子が僕に話しかけてくれたのです。彼は日本語のクラスを取っていて、僕が日本人であることを伝えるととてもうれしそうな表情で日本語を使い話しかけてくれました。初めての部活動の日に、アメリカで最初の友達ができました。そして、このことをホストペアレントに伝えると、まるで自分のことのように喜んでくれました。これを見て僕はホストファミリーを信頼し、頼ってもいいんだという気持ちになったのです。この時から少しずつ友達も増え、プライベートでも遊ぶようになりました。

学校が始まると、僕はまた授業についていくことができるのかとても不安でした。しかしアメリカにいる先生は、僕のことを理解してくださり、放課後に聞きに行くとなりやすく教えてくださいました。カウンセラーの方も、学校の授業についての相談や、学校行事について、なるべく僕がたくさん体験ができるように気を遣ってくださいました。授業を何度か変更する手伝いをしてくださったり、10年生の僕がプロムや卒業式に出ることができるように学年を変更してくださったりしました。アメリカでは先生やカウンセリングの先生がとても頼れる存在で、すぐに最初の方で抱いていた不安もなくなりました。

もちろん、一年中楽しんだだけというわけではなく、いくつか苦勞したこともありました。





アメリカでは、ホストファミリーがとてもいい人で、友達もでき、先生にも頼ることができました。しかし、何度かホームシックになりました。ふとした時や何も考えていない時に、日本にいる家族のことを思い出すと涙が止まらないこともありました。また、初めの方は、アメリカのファーストフードや高カロリーな食事もとてもおいしく食べていました。しかし、だんだんその味に飽きてくると、日本食がとても恋しくなりました。このような時に僕は何でも前向きに考えることがいかに大切かを知りました。僕はホームシック等になった時には、「こんな食べ物はアメリカでしか食べられない」と思ったり「しばらく家族と離れるのもいい経験だ」などポジ

ティブに考えたりして克服しました。

こうして過ごしていると、だんだん帰国の日が近づいてきました。最後の授業、最後のランチ、最後の友達との遊びなどがだんだん近づいてくるにつれて僕はとても悲しくなり、泣きそうになってしまうことも増えました。僕は忘れられてしまうことのほうが離れることよりもつらいと思い、特に親しかった友達に手紙を書き始めました。書いている途中もいろいろな思いがこみ上げてきましたが、涙をこらえました。そしてその手紙を学校が終わったときにすべて渡しました。

とうとう帰国の前日、いろいろな友達に会いに行きました。そして夜遅くまで花火をしたり、たくさん遊んだりしました。そして家に帰りすぐに空港に向かいました。ホストペアレントは空港の荷物チェックまでついてきてくれました。別れが近づくにつれて思いがこみ上げてきて別れのハグをしたときに周りから心配されるくらい泣いてしまいました。アメリカに身近な大切な人ができたこと、それと同時にこの身近な人たちのおかげで自分の留学がとても濃いものだったことを実感しました。

この留学は一人ではできず、家族をはじめとして岐阜県教育委員会、YFUの方々などたくさんの方々にお世話になりました。たくさんの貴重な経験をさせていただいたことにとても感謝しています。これからはこの留学の経験を生かして生活していきたいです。

